二〇二一年一〇月一六日

稔り田の広ごる郷にケアホーム　はく子

木の実落つ磴に音せる古刹かな　よし子

文化財なりし母校や小鳥来る　なつき

軒下の干柿添へて農家カフェ　かかし

山襞に隠る棚田や落し水　凡士

蹲に水輪いくたび銀やんま　素秀

望郷の碑たつ丘の上草紅葉　よし子

柿簾夕日に映える里の道　かかし

残る蚊の幽けき翅音払ひけり　素秀

古城趾の大木の松色変へず　こすもす

石段を五線譜とびに木の実落つ　よう子

薄紅葉谷の吊り橋揺れやまず　よし子

句碑歌碑をめぐる寺苑の萩の中　はく子

紫蘇の実をしごく両手の香りかな　よう子

身に入むや亡夫宛に届く文　むべ

行先は足の向くまま秋高し　わかば

能勢の里烟らせ栗の毬を焼く　よう子

毎週句会秀句・みのる選・二〇二一年一〇月一七日